

# 第 22 回国際統一思想シンポジウム

「諸科学の統一と統一思想：統一思想に基づいた学問にむけて」

2010 年 12 月 3 日—12 月 6 日

千葉・浦安・一心教育院

## 統一思想における真理と方法についての 予備的考察

野田啓介

統一神学校准教授、ニューヨーク、USA

統一思想研究院

本論文は、真理と方法のかかわりについて、統一思想がどのような立場に立っているかを明らかにするための準備草稿です。統一思想のテキストシリーズの中の『統一思想の哲学的入門』の一部をなす予定です。

本論文は、統一思想における真理と方法のかかわりを解明するための予備分析です。統一思想の真理概念の完全な解明、解明における方法の完全かつ包括的な提示を果たすものではありません。しかし、統一思想の真理観を解明するためのステップとして、真理にかかわる統一思想の諸概念を明らかにしたいと思います。

## 要約

この論文では、まずプラトンが提示した「真理の循環」をとりあげ、そこから真理が「暗黙の知」として人間の心にあることを論じます。真理が存在と密接な関係にあることは、統一思想の存在概念、「個性真理体」という概念にあらわれています。さらに、どうして真理は「隠されている」のか、そして真理はどのように開示されるのか、という問題をとりあげます。前者の問いには、統一思想の「創造と復帰」の観点から、後者の問いには、「内的(自己)と外的(世界)」の観点から答えます。宗教を含む諸学の方法は、研究対象の特殊性によって規定されますが、その研究の大きな枠組みは、この二つの観点、創造と復帰、内的(自己)と外的(世界)によって形成されています。

この論文では、さらに真理の二つの開示の仕方、象徴と形象を検討します。その分析は、なぜ思惟でみいだされる真理が、実在世界の真理と照応するのか、また歴史的文化的な制約を受けている言語や人間の思惟にある論理的数理的なしくみが、どうして世界を正しく把握し、表現する手段となりうるのか等、思惟と実在にかかわる真理の問いを検討します。統一思想のロゴスの概念は、思惟と実在の一致の根拠を示し、主要な真理観である「真理の照応説」(correspondent theory of truth)の背景を説明します。それはさらに、言語がどうして真理を把握し、表現する主要なてだてであるのか、という問いにも答えます。

### 1. 真理の循環性

#### A. 解釈における真理の先行性と真理の循環

##### 真理の循環にまつわるプラトンの問い

プラトンの提示した古典的な問いはこうです。「もし、人間が真理を知らず、それゆえに真理を求めるのであれば、いかにして人間は、見出した真理の是非を判断できるのか？ 人が真理を探究し、何かを見出したとき、何が真理であり、何が偽であるかを判断する。しかし、真偽を判断できるためには、人間に真理の判断の基準が、既に備わってななければならぬのでは

ないか。しかし、逆に、もしも人間がもともと真理をもっているのならば、どうして真理を探究しなければならぬのか？」

この問いに対するプラトンの解決方法は想起説です。「人間の魂は、既に真理を知っている。しかし、肉体の欲望によってそれが曇らされ、分からなくなってしまう。しかし、出会った真理に促されることによって、人は忘却していた真理を想起するのである」別の言い方をすれば、人間の魂には「暗黙の知」が既に備わっていて、その知に「目覚める」ことが、「真理を知る」という事柄だというわけです。そのためにプラトンの師のソクラテスは、「自分は、何かを教えるのではなく、相手の魂を目覚めさせるに過ぎない」と語り、自分の対話の方法を「産婆術」と呼びました。助産婦は、妊婦に赤ちゃんを「与える」わけではなく、既に妊婦の胎内にいる赤ちゃんが出てくるのを助けます。そのように、哲学者としての自分は、対話の相手が、自分の魂に既に備わっている真理に「目覚める」のを助けるだけだと考えました。

## B. 真理の問いと個性真理体という存在概念

別の言い方をすれば、そもそも「問い」を掲げること、問題を提起することは、何も理解がないところからは生まれません。漠然としているある種の予期、期待、予備判断とでもいえる「求めるべきことへの気付き」が不可欠です。欠けているものを「欠けている」と感じるためには、予備的な「求め」が必要です。「予期し、期待する」ためには、「求める」ためには、その求めを感じさせる何か人間に備わっていなければなりません。何もないところには、「求め」も、「問い」も生まれません。何か欠けていても、「欠けている」ということに気付くこともないに違いありません。

同じことを真理の観点から考えると、人はまず真理の内であってはじめて非真理に気付いたり、真理を求めたりするといえます。すでに真理の内になれば、どうして自分が非真理のうちにあることに「気付く」ことが可能になるのでしょうか？ 真理がないから真理を求めるのではなく、既に真理の内であり、それが自分に明らかでないからこそ真理を求めようのではないのでしょうか。暗黙の知とでもいいうる、真理への漠然とした、意識にはのぼっていない知があり、その知を意識にのぼらせること、はっきりとした知にもたらすこと、それが「真理を求める」行為です。<sup>1</sup>

このことから得られるひとつの結論は、「人間が既に真理の内にあることによって、真理を希求する人間の行為、そして真理を見分けることが可能になる」ということです。そして、「人間が真理の内にある」ことを存在論的にとらえたのが、統一思想の「個性真理体」という概念

---

<sup>1</sup>同様の洞察はハイデッガーに見られます。ハイデッガーは哲学の課題を、既に暗黙のうちに知っていることを明確な理解にもたらすことだと考え、真理を「アレティア」（隠れなきこと）と定義しました。

です。<sup>2</sup> 個性真理体の概念の詳細な分析は後に論じる存在論に譲ることにして、「真理の内にある」ことから生まれる疑問をもう少し検討してみましょう。

もしも人間が既に真理の内に入り、その存在が少なからず真理を体現したものであるとするならば、なぜその真理が人間に知られていないのか、明らかでないのか、あえて求め、探し、見出されなければならないのか、という疑問です。言い換えれば、真理はどのようにして秘匿されているのかという問いです。

## 2. 真理の秘匿（ひとく）と開示

### A. 二つの視点：創造と復帰、主体（人間）と対象（世界）

真理が秘匿されているというのは、真理が人間に明確に理解されていないことを意味します。しかし、明確に理解されてはいないにしても、まったく無縁だという意味ではありません。秘匿ということで、真理は暗黙の知として、漠然とした形、特定できない形で、人間の存在に可能性として組み込まれていることを意味しています。問題は、人間が真理の内に入りながら、どうしてその真理が秘匿されているのかという点です。この問いに答えるには、二つの視点が必要です。ひとつは創造と復帰という視点、もうひとつは主体（人間）と対象（世界）という視点です。この二つの視点は絡み合い、「真理を求める」人間の試み、真理の観点からいえば「真理が開示される」しくみが成り立っています。意識するとしなないに関わらず、真理に関わる諸学の営みも、この二つの視点を前提にして探求の枠組みが組み立てられています。そこでこの枠組みをつくっている二つの視点を解明しましょう。

### B. 真理開示における二側面：創造と復帰

人間の探求や、経験が有意味であることは疑い得ません。肉体に成長過程があり、精神も成長の過程を経ることは否めません。大人になった後も、経験を重ねながら生涯に渡って探求を深めます。人生は、秘められた真理を発見し、同時に自らが真理の実体となってゆく不断のプロセスです。真理が秘匿されていることによって、人間の探求が意味あるものとなり、成長や経験が意味あるものとなることができます。真理が秘匿されていることは、人生が発見や目覚め、驚きの過程となる上で不可欠の条件です。その意味で、真理の秘匿は、本来的、自然的なあり方、すなわち創造本然のあり方であるといえます。

真理が秘匿されておらず、既知のことであるならば、人間はそれを探求する必要はありません。そして、もし逆に、人間が、真理に全く無縁のものとして閉ざされていたとすれば、真理を問

---

<sup>2</sup> 統一思想には存在者について二つの存在概念があります。一つは個性真理体、もうひとつは連体です。前者は個体をそれ自体としてみた時の存在者のあり方、後者は、その個体の相互連関的な関係性をあらわしています。

うことも、真偽を判断することも不可能です。人間が真理を求め、探求し、経験を重ねていくというこの事実は、人間における真理の逆説的なありかた、真理が自分の中にありながら隠されているということによって説明が可能です。

### C. 復帰という課題

しかし真理にまつわるもうひとつの重要な問いがあります。人間は、根本的な非真理の中にあるのではないか、非本来的なあり方をしているのではないかという疑問です。プラトン以来、人間のあり方は問われ、ことに宗教ではそれが中心課題とされてきました。プラトンにおいては肉体の欲望と魂の葛藤としてあらわされ、キルケゴールやヤスパース等の実存主義では、不安、絶望、自己の喪失などの現象をもとに、人間の本来のあり方と非本来的なあり方の問題が問われてきました。「人間は本来あるべき状態を失っており、人生はそれを復帰する過程である」という意味で、統一思想では、失われた本来の状態を取り戻すことを「復帰」という概念でとらえています。

真理を探究するという場合、非真理の中にある人間が、どうやって本来のあり方を取り戻すのか、そのための真理探究という課題が、先に述べた、自然的な人間の成長と探求の営み、すなわち創造本然の営みに重なります。このように、本来的、自然的な真理探究の過程と、非本来的な状態にある人間が、本来のあり方を取り戻すために求められる真理探究過程、統一思想という「創造」と「復帰」という二つの側面が真理の開示には伴っています。

### D. 人間が真理のうちにあることの証左：善への志向性

既に述べたことですが、人間が非真理にあるという自覚も、人間が根本的な真理の中にあるから生まれるものです。その意味で、真理の知である暗黙の知は、人間のあり方そのものに伴ったものであり、消滅させることも出来ないし、失われることもありません。個性真理体という統一思想の存在概念は、この「真理として存在する人間の根本的なあり方」をあらわしています。人間が既に真理のうちにあるということは、人間の善への志向性においてもあらわされています。人間は、その行為の正邪にかかわらず、「自分の行為を正当化しようとする」志向があります。どんなに悪い行為であったとしても、「止むを得ない理由」「正当化する理由」を捜してその行為を解釈します。過去の生い立ちであったり、やむなき窮状であったり、誰もがやっていたことだから等、理由と行為のいかんをとわず、人は自分の行為を正当化して解釈しようとし、道徳における教育や訓育というもの、改心や矯正ということは、こうした善への根本的な志向があってはじめて可能です。人間に善への志向がなければ、道徳の教育や、非行少年や犯罪者の矯正など意味をもちません。道徳における「教育」とは、つまるところ「説得」であり、人間に本来備わっている善への志向性を目覚めさせることに他なりません。

このように良心の現象、善への志向性などは「人間が真理のうちにある」ことの証左です。どんな行為が正しく、どんな行為が不正なのか等、具体的な行為の判断には文化的歴史的な違いがありますし、誤りもあり、判断の明確さには個人差もあります。しかし、人間が自分の思い

通りに自分をごまかすことができず、正しさを希求せざるを得ないという事実、正当化しようとするという志向から逃れることができないということのうちに、人間の真理との不可欠なかわりが証左されていると思います。良心も、その判断基準には正誤がありますが、人間のもつ正当化への希求、志向性は、現実のあり方を超えて、人間と真理のかかわりをあらわしていると考えられます。

## E. 真理探究における二つの志向性：探求する主体と探求の対象

真理探究におけるもう一つの視点は、探求の主体としての人間そのものに向かうか、それとも、探求の対象に向かうかという、異なったふたつの志向性です。人間としての自分の生き方、あり方を問い、自らを探求の主題として真理を探究する方向性があり、宗教や実存主義などは、この方向をとります。一方、できる限り人間の思い込みや主観的な憶測を排除して、真理探究の方向性を、対象としての現象に限定してゆくのが諸科学です。宗教では、その教えを語るものが、語る真理と内面的にどう関わっているのかが問われます。つまり、真理は、その人自身において体現化されることを求めます。しかし科学においては、語る者は、真理と内面的にかかわることはありません。自分のあり方は括弧にいれ、真理を自分の外にあるものとして、つまり対象としての現象におけることがらとして扱ってゆきます。

つまり、真理への人間の関わり方をどう考えるかによって、宗教と科学という二つの探求の営みがあらわれ、統一原理では、そこに見出される真理を、内的真理と外的真理という形で概念化しています。むろん宗教の問いが、人間の生き方やあり方に限定されているわけではありません。宗教も、人間の生き方あり方を越えた根本的な真理を探究します。しかし、その探求の過程には、問題を問う人間そのもののあり方、問う人自身のあり方を必然的に問います。つまり「問い」に傍観者のように関わるのではなく、あくまで自己を媒介として、「問う者自身が問われる」という形で探求がすすめられます。しかし、科学においては、問う者を探求の対象からあえて切断し、傍観者として、いわば「客観的に」探求をすすめます。真理への問いが、必然的に探求する者に向かい、探求者を含むのか、それとも探求者は「傍観者」として立つのか、そこには決定的な態度の違い、探求の志向性の違いがあります。

## 3. 真理開示の諸相と学の方法

### A. 宗教と科学

真理開示のプロセスという観点からみると、宗教は「自己を通して開示される主体的真理」であり、科学は「対象化された真理」であるということもできます。主体的真理というのは、主観的な憶測、個人的な思い込みという意味ではありません。それは認識の主体そのものが、探求に必然的に巻き込まれているという意味です。真理の普遍性を求めるという点においては宗教と諸科学も同じです。

宗教においても科学においても、人間の単なる憶測や空想を排除し、真理を解明してゆくという課題に違いはありません。その課題を遂行するために確立されたのが方法です。宗教においては、聖典の解釈の仕方、宗教的実践のあり方、儀式等における真理探究の方法が歴史的築き上げてきました。科学においても、それぞれの個別科学において、科学共同体が歴史的に作り上げてきた研究の手続き、確証の仕方、実験の方法などがあります。<sup>3</sup>

真理探究において、創造と復帰、主体（内的）と対象（外的）という二つの要素が、異なる程度とレベルで作用しながら、宗教を含む諸学において、それぞれの探求の方法が確立されてきました。そしてこの二つの要素がどのように、どの程度考慮されねばならないかは、それぞれの学によって異なります。一例をあげれば、物理学では、自然的（創造的）にある現象を対象として探求します。しかし、心理学や精神分析学では、創造と復帰に要素が絡み合い、さらに主体と対象が複雑に交差するために、物理学とは異なった固有の方法が求められます。諸学が、固有の研究対象に対応した固有の方法論をもつのに対し、統一思想は、諸学の探求が行われるその大きな枠組みを明らかにするものです。

## B. 真理の一致、真理の同一性の根拠

さて、ここにひとつの疑問があります。諸学が、世界に展開している現象を把握し、それを理論化するにあたり、人間の思惟に働いている論理に従い、整合性があるように理論を組み立てていきます。しかし、人間が物事を把握する認識の機構、思惟のしくみが、どうして実在する世界の機構と一致しうるのかという疑問があります。一例をあげます。理論物理学者が、数式を用いながらある結果を予測したとします。観測や実験の結果、その予測どおりになることがあります。さて、問題は人間が用いている数学的な論理展開が、どうして実在の形式と一致しているのかという点です。自然が合理的であり、数理的であるという保障はどこにあるのかという問題です。思惟の営みや精神の所産と物理世界の現象が、相応し、一致しうる根拠はどこにあるのかという問題です。<sup>4</sup>

これは認識論における課題です。詳細な議論は認識論で論じます。ここでは、真理の問題を論じた時に、必然的に「人間の思惟と実在がどうかかわっているのか。思惟でとらえられたことと、実在の世界がどう一致しうるのか」という認識論の課題に巻き込まれることを指摘するにとどめます。

---

<sup>3</sup> トーマス・クーンのパラダイムという概念は、自然科学のもつ社会性、歴史性を明らかにし、自然科学に解釈学的次元のあることを示唆した画期的なものです。

<sup>4</sup> これは認識論における課題です。簡単にいえば、人間の認識は、経験を通して外界を映したものだという経験論の立場、神が人間に世界を合理的に理解する能力を与えたとするデカルトのような理性論の立場、そして、現象として与えられる世界を、人間がもとからもっているしくみに従って構成し、その構成の結果が経験であるとするカントの立場があります。詳細は認識論で論じます。

真理観にはいくつかありますが、そのなかで最も基本的なものは「観念と実在の照応説」(correspondence theory of truth)です。簡単にいえば自分が考えたこと(観念)が、実際(実在)と一致したときに、それを真理だと考えるというものです。<sup>5</sup>

先に述べた主体と対象ということでは、真理探究の主体である人間が自らのうちに秘めている内なる真理と、探求の対象として展開している世界を成り立たせている真理が、どうして一致しているといえるのか、という疑問があります。内なる真理と外なる真理の一致がどうして保障されるのかという問題です。さらにその「一致」とは、何を意味しているのかという問いもあります。<sup>6</sup>

さらにそこには、言語と真理のかかわりへの問いが横たわっています。真理は、言語によって表現しつくされるわけではありませんが、言語は真理を表す主要な媒体です。人間の思惟の世界で組み立てられる言語が、どうして思惟の外にある実在の世界の真理を表しうるのかという問いがあります。いい換えれば、言語表現において確保されている、あるいは表わされている真理は、どうして実在と一致しているといえるのでしょうか？ 別の言い方をすれば、文化的歴史的制約を受けている言語が、果たして文化と歴史の制約を超えたものを把握することはできるのでしょうか？ それとも、言語を越えた真理など存在しないのでしょうか？<sup>7</sup> 統一思想は、この問題にどう答えているのでしょうか？ この問いに答えるには、「言語と真理のかかわり」という大きなテーマを論じなければなりません。ここでは、真理観の予備的分析として、統一思想のロゴスへの論及を分析し、ロゴスと個性真理体のかかわりを考えてみたいと思います。<sup>8</sup>

### C. 個性真理体における真理開示：ロゴス、象徴（言語）、形象（イメージ）

---

<sup>5</sup> 真理観にはそのほか論理的な整合性から見る真理の整合説 (Coherence Theory of Truth)、役に立つかどうかから見る実用説 (pragmatic theory of truth)、合意を基準にみる合意説 (consensus theory of truth)、ハイデッガーの開示としての真理説、キルケゴール等による「生きられた真理」「主体的真理」等があります。

<sup>6</sup> 統一原理では、「宗教の求めてきた内的真理と科学の求めてきた外的真理を一つの課題として解決」するという「真理における宗教と科学の統一」への言及があります。内的真理と外的真理がどこでどのように関わり、その統一あるいは一致とは何を意味し、どのように統一が保障されるのかという問いがあります。

<sup>7</sup> 禅は、言語を越えた真理をとらえるという課題から出発しています。不立文字という禅の指針は、真理把握における言語の限界を物語っています。

<sup>8</sup> この問題は、論理と感性、言語的思惟と感性的な経験がどのように接合しうるのかという問いを含んでいます。



統一思想は、二つの命題を前提としています。第一の命題は、「世界が神によって創造された神の実体対象である」<sup>9</sup>というものです。第二は、「実体対象は、象徴的実体対象、形象的実体対象という二形態がある」という命題です。<sup>10</sup> この命題は、神とは何か、神と世界の関係とは何かという問題を含んでいますが、この問題は存在論で改めて論じます。

統一思想は、人間を、「無形の神性が形象として、感性<sup>11</sup>にとらえられるかたちに実体として現象化した存在」と見、人間以外の他の存在、つまり動物、植物、鉱物等を、「神性が象徴的な形で現象化した存在である」と見ます。

ここにあるのは、根源的には一つの真理が、形象と象徴という異なった程度で現象化したという観点です。精神に映る真理の多様な形態、言語やイメージ、五感に現れる形態は、同一の真理が、異なった程度で現象化したものだということです。<sup>12</sup> 論理と感性、言語的思惟と感性的経験は、象徴と形象というふたつの真理開示のあり方に対応したものだという意味です。

ここで重要なことは、すべての存在の創造がロゴスを媒介としてなされたという点です。それぞれの存在物は、ロゴスが現象化したものと見ることができます。言語や数理は、存在をロゴスに近いレベルでとらえるしくみであり、感性は、色彩、形、音、動きなどとしてあらわになった、つまり形象的にロゴスが現象化したものをとらえるしくみです。数理の汎用性、つまり、数理性がすべての存在や現象にあてはまり、言語があらゆる現象を把握するしくみでありうるのは、全存在がロゴスを媒介にして創造されたことに起因しています。

このようにロゴスは、存在を規定すると共に、思惟や認識のしくみを規定しています。ロゴスが存在と思惟のもとになっていることにより、思惟と存在の一致が成り立ちます。いいかえると、同一の真理が思惟と存在のしくみを成り立たせていることに思惟と存在の原理が一致する根拠があります。

ここで問題は、象徴、形象の意味と内容ですが、そこでまずこういう形態的な差異がある理由を考え、そこから象徴、形象の詳しい意味を考えます。象徴的な開示とは言語、数理、シンボ

---

<sup>9</sup> 神が対象をもつということは、神が相対的な関係にあることを意味します。絶対的で、超越的な神がいかなる意味で相対的な存在であるのかという問いは、さらなる検討を要します。

<sup>10</sup> この二つの命題は、さらに根本的な命題である「神が存在する」、「神が世界を創造した」という命題を前提としています。これらの諸命題は、それ自体としては、直接的に証明も反証もできないものですが、その正誤は、そこから導かれた説明の整合性と一貫性、経験的な確証を経て確かめられるものです。ここにはそもそも「証明」や「確証」とは何を意味するのかという問いがあり、これも別に論じなければなりません。

<sup>11</sup> 統一思想では、感性は霊的五感と肉体の五感の両者を含んでいます。イメージを含む人間の経験、感覚は、霊肉の両者が関わっている現象とみるべきかもしれません。

<sup>12</sup> ここから真理の認識は、内なる真理と外なる真理の照合一致であるという統一思想の認識論が生まれます。

ル等による真理の開示を意味し、形象的な開示とは霊肉の五感で感知できるような形態、色彩、音、匂いなどのイメージによる開示を意味します。

#### D. 真理の象徴的な開示：数理と言語

真理の象徴的な開示とは、数理、言語による真理の開示を意味します。数理性は、最も基本的なもので、すべての存在に普遍的に浸透しています。物理現象はもちろん、人間の美的経験、さらに宗教経験まで、数理性は無縁ではありません。<sup>13</sup> 数理論理学に見られるように、人間の思惟の論理構造を数学的にあらわすことができるのも、数理性の汎用性を示しています。

真理の開示は普通言語を媒介にして行われます。この問題をどう考えたらいいのでしょうか？ どうして真理の開示が、言語を媒介にして行われることが多いのでしょうか？ この問題は、そもそも言語とは何かという大きな問題に繋がっています。ここでは真理の開示の枠に限定したかたちで考えて見ます。

統一思想は、すべての実体的な存在は、ロゴスを媒介として実体化したと見ます。実体化した存在そのものは成長したり変化したり、その様態が変化しますが、それが何であるかという本質はロゴスによって規定されています。ちょうど人間の成長が栄養状態や環境によって変化するにしても、DNAの基本情報には変化がないように、ひとつひとつの実体のロゴスは、その本質を規定しています。言語は、そのロゴスを、それぞれの文化的歴史的背景のなかでとらえます。ロゴスそのものは不変ですが、それを多様で変化しうる言語によってとらえるわけです。

つまり人間が言語によって真理の開示をおこなうというのは、諸存在がロゴスの実体化として存在しているという存在の基本的なあり方に起因したものです。もちろん言語のひとつひとつが世界の諸存在に一つ一つで対応しているわけではありません。言語自体がひとつの自立的な世界を構成し、その言語の組み合わせは、現象の多様なあり方を描写するだけでなく、あらたな現象の可能性、意味の可能性を求めて、あらゆる可能性を追求してゆきます。ちょうど数学が、数理性の新たな秩序の可能性、すなわち新しい数学の可能性を追求していくように、言語は、自立的な言語世界の中で、新しい世界の発見をめざして、その可能性を追求し続けます。

そして、言葉によって、新しい存在の意味が見出され、存在は新しい相貌をあらわします。つまり、存在の新しい可能性、意味が発見され、生まれます。言葉は、このように存在の真理を開示してゆきます。

---

<sup>13</sup> 絵画、彫刻における黄金分割、詩のリズム、音楽における人間の美的経験は、数理性と結びついています。哲学史の中で、数理性と美的経験、さらに宗教経験の関連に言及したのはピタゴラス教団がはじまりだとされています。

言語の可能性はシンタクス（構文論）、セマンティックス（意味論）の規則によって許される範囲の中で追求されます。そしてこの言語の規範性、規則性は各言語に固有であり、歴史的文化的に規定されています。しかし、問題は、どうしていかなる言語でも、規則や規範があるのかという点です。諸言語が相互に変換不能（incommensurable 通約不可能<sup>14</sup>）で家族的類似（family resemblance）<sup>15</sup>しかないのか、それとも諸言語に汎用する普遍的な構造や規則があるのかは別にして、言語にどうして規則、規範があるのかという問いです。言い換えると、言語は、実在世界とどうかかわっているのかという問いです。

リチャード・ローティ（Richard Rorty）は『哲学と自然の鏡』（*Philosophy and the Mirror of Nature*）で、哲学の認識活動は、自然を写す鏡のように、実在世界を認識し、あらわすものではなく、社会的な文脈の中でその意味と役割があるに過ぎないという実用主義的（pragmatic）な哲学観を展開しました。<sup>16</sup> そうなると、真理は、実在世界との関連で論じべきものではなく、あくまでも社会的文脈の中でのみ論じられるべきものであるということになります。この観点は、哲学の営みを存在論からは遠ざけ、社会現象に定位して、そこから哲学を構築しようという試みです。<sup>17</sup>

統一思想の観点から見ると、すべての存在は、ロゴスとしての原初的な秩序付けのしくみが基底にあります。そして諸存在が相互関係をもつことができ、世界が全体としての秩序を保つこ

---

<sup>14</sup> トマス・クーンのパラダイム論の帰結は、諸言語の通約不可能性（incommensurability）です。通約不可能性というのは、数学で用いられる概念で、分数間に共通する約数がないことを意味します。言語でいえば、諸言語を比較しうる共通の尺度はなく、その結果、完全な翻訳は不可能であるという帰結を生みます。翻訳は、あくまで類似した意味を当てはめるだけであり、完全な翻訳はできないこととなります。さらにこの問題は、異なる文化に住む人が、どれだけ他の文化にいる人を理解できるのかという異文化間の理解可能性の問いにつながります。

<sup>15</sup> ヴィトゲンシュタインが論じた家族的類似を指します。ヴィトゲンシュタインは、言葉の意味は、「それがどう使われているか」によって決められるもので、その使われ方には「家族の成員が互いに似ているような類似性があるだけで、普遍的な共通性などない」と論じました。例えばゲームという言葉の意味は、すべてのゲームに共通する「意味」があるからではなく、ゲームという言葉の使われ方に家族の成員が似ている程度の類似性があるからに過ぎない、と彼は論じました。ここから家族的類似の概念は、様々な分野で使われるようになりました。

<sup>16</sup> ローティは「一切の基礎付け主義（foundationalism）を拒否する」ポストモダンの観点を押し進めました。ポストモダンの哲学者は、哲学を「普遍的な真理を求めて、何かに基礎付ける営み」とは見ません。真理は普遍的なものではなく、多様で、それぞれの社会的文化的文脈で生まれてくるものだと見ます。

<sup>17</sup> 歴史的にたどれば、大きく存在論から退いたのはカントからはじまっています。カントは時間、空間を人間が現象を受けとめる時の形式、つまり認識の感性的形式とし、量、質、関係、様相をそこで受容された内容を総合統一する形式、つまり悟性形式としました。それまで存在世界の属性と考えられていたこれらの形式を、人間が現象を把握し、「経験」というものを作ってゆくときの人間の認識の形式としました。存在の属性とされていたものを認識の形式に転換したこの哲学的試みを、天動説から地動説に転換したコペルニクスになぞらえて、「コペルニクス的転換」と呼びました。カント以来、哲学は形而上学（存在論）から遠ざかることとなります。（カント自身は、存在論を道徳哲学において打ちたてようと試みています。）

とができるのは、このロゴスのレベルで、すべての存在が共通の「ことば」によって秩序付けられているからです。これは人間の言語によって、多様に表現できる存在のロゴスです。数理性は、基底にある最も基本的なロゴスの表現です。また物理現象、化学現象など物体性をともなうすべての存在に普遍的にあてはまる規則、法則もあります。数理性、法則性は、現象の基底にあるロゴスに、人間が言語的表現を与えたものです。

ロゴスは存在を秩序付ける仕組みです。言語はロゴスの実体として存在する人間が、ロゴスという基底を持つ諸存在をとらえ、それを言語空間のなかで秩序付けるためにそなえている機構です。「名づけ」たり、「呼びかけたり」、「応えたり」する命名、発話の言語行為は、ロゴスをその基底にもつ世界を、思惟の中で秩序付け、世界をとらえるしくみであり、「理解する」という行為は、言語による秩序付けに他なりません。

人間が高度な言語をもっているということは、ロゴスによって創造された世界を、その本質においてとらえ、ロゴスによって組み立てなおす力を持っていることを意味します。人間が「名付け」たり、「発話したり」する行為は、人間がロゴスの実体として存在することをあらわしています。

## E. 真理の形象的な開示：五感と形象

統一思想では、人間を「神の形象的実体対象」ととらえ、人間以外の存在と区別しています。人間以外の存在は、「神の象徴的実体対象」ととらえています。人間以外の存在が「象徴的な実体対象」であるというのは、神性のある要素が、象徴的に現れているという意味であって、それらの存在が、ものごとを把握するのにシンボルをもちいて把握するという意味ではありません。シンボルをシンボルとして把握しうるためには、高度の抽象能力が求められ、言語や数理を把握しうる能力が必要です。この能力は人間に固有の能力です。真理の形象的開示とは、真理が五感の感性でとらえられる形、色、匂い、感触、音などであらわれるという意味です。

言語においては、その言語の体系内における言葉相互の関係を経て意味が開示されます。しかし、形象は直接的に感性に届けられます。感情は表情を通して、より直接にあらわれます。とりわけ顔の表情は、心の中の感情をあらわします。喜怒哀楽の感情表現に文化的な違いはありますが、基本的な悲しみ、恐れ、幸せ、喜びの感情の変化によってもたらされる生理的な変化、それに伴う顔の不随意筋の動きを伴った表情には文化に制約されない側面があります。<sup>18</sup>

---

<sup>18</sup> Ekman, Paul. *Emotions Revealed: Recognizing Faces and Feelings to Improve Communication and Emotional Life*. New York: Times Books, 2003.

統一思想からみれば、感情が表情を通してあらわされるという現象は、存在に形象的な開示の段階があるからです。言語が真理の象徴的な開示のしくみだとすれば、感情が表情として直接的に表されるのは、真理の形象的開示のしくみです。

音声による感情表現も同様です。喜びや悲しみ、恐れ、不安感などの感情は、声の調子、震え、色合いによってあらわされます。形象は主に五感によって感知され、五感による直接的な感情の表現は、五感を備えた生物においてなされます。

抽象度の高い言語をもたない人間以外の生物においては、この形象化のしくみが重要な伝達方法となっています。動物は自分の身体の動き、表情、羽毛の色彩の変化、鳴き声など、五感に対応した形象的な手段を通して表現し、コミュニケーションをはかります。しかし、人間以外の生物においては表情化は限定されており、豊かな心情の表現は、人間に固有のものです。

要約しますと、人間が神の形象的実体対象であるということは、人間が、目に見えない神性を五感に感知できる姿かたちにあらわした存在であるという意味です。一方人間以外の存在が、神の象徴的な実体対象であるということは、それらの諸物が、神性のある側面を、限定された形で表した存在であるという意味です。

人間以外の存在は、象徴の現れであり、存在そのものが象徴の実体化したものであるのに対し、人間は、言語をもつことによって、象徴的存在である諸存在を主管する手立てを得ています。統一思想では、人間を「万物の主管主」と規定していますが、人間は「高度の言語をもつ」ことによって、シンボル上の諸存在の主管が可能となっています。高度な言語を持つ人間は、抽象的な思惟能力に優れ、シンボルをシンボルとして把握し、それを言語的に処理する能力をもっています。

言語はさらに存在に秘匿された真理をほりおこし、存在に新しい意味を与えます。経験に形と意味を与えてしあげ、蓄積し、継承させてゆくことも、言語によって可能になります。高度に発達した言語がなければ、象徴を象徴としてとらえ、操ることはできません。また五感をもつ存在は、形象化を用いてコミュニケーションをはかりますが、心情を表情に表しうる人間は、神の心情を豊かに表象化しうる存在です。

人間は象徴（言語）と表象（感性）のレベルを融通無碍（ゆうづうむげ）に交錯させながら思惟と経験を豊かにしてゆきます。統一思想の本性論では、人間の本性として心情、理法（ロゴス）、創造性をあげていますが、そうしたあり方を現実的に可能にしているのが、人間の象徴化、表象化の能力です。

## 結論

統一思想は存在するものを個性真理体ととらえています。<sup>19</sup> その存在概念には、真理との深いつながりがあらわれています。さらに人間とそれ以外の自然的存在を、それぞれ神の形象的実体対象、象徴的実体対象とらえることによって、真理が形象（イメージ）、象徴（言語、数理）の二つのレベルで開示されていると見ています。形象的対象というのは、無形の神性が見える形となったことを意味し、象徴的対象とは、神性のある面が限定的、先鋭化した形で現象化したものと見ることが出来ます。人間は、その能力が、限定化、先鋭化されていないことによって、広範囲で、多様な形に用いることが出来るようになっていきます。

人間は眼に見えない世界を形象化し、五感で見、聞き、ふれられる形に変換する能力にすぐれています。人間が心情をあらわす「表情」をもっていることは、そのよい例です。また高度の言語（数理を含む）を持つことによって、人間は、諸存在の基底にあるロゴス、諸存在の本質をとらえ、それを言語空間（数理性を含む）の中で再構成します。人間の創造性は、こうした表象化、言語化、数理化の力によって支えられており、こうした諸力は真理を現象化するしくみです。

真理は、個性真理体である人間の存在に組み込まれ、「暗黙の知」として心の内に原初的な形で秘められています。<sup>20</sup> 世界もまた個性真理体として真理が体現化したものとして存在しています。「暗黙の知」は、言語化し、表象化することにより明るみに出、意識された知になります。真理が「暗黙の知」として秘められていることによって、人生が真理の発見と体現化のプロセスとなることが可能です。このプロセスは人間の本来的、自然的なプロセスです。しかし、人間の真理探究には、もうひとつの面、「本来のあり方を取り戻す」つまり「復帰」という面があります。「人間が非真理の中にいる」という洞察も、人間がもっと深いところで、根本的に真理と結びついているからこそ生まれてくるものです。

さらに真理の探究には、探求する人自身を問い、内面に希求する方向と世界に向かい、世界として現象化した真理を希求する方向があります。前者の内的方向においては、探求する人間自身が必然的に問いに巻き込まれ、自分の内面的なあり方が問われるという意味です。真理への問いには、真理を発見するというだけでなく、自分が「真理の実体となる」という実践的課題が含まれます。また後者においては、真理の探求は外の世界に向かい、問う人間は問いから離

---

<sup>19</sup> 統一思想には、神を除く存在に関する限り、二つの存在概念があります。個性真理体と連体です。前者は、存在者をそれ自身としてみたときのあり方をあらわし、後者は、存在者を他の存在者との関係で見たときのあり方です。前者は、それぞれの存在者が真理の実体化したものであることをあらわし、後者は、その存在者が、世界の中で、どういう「意味」をもって存在しているのかをあらわしています。その存在の意味は、目的や他との関係を通してあらわれるからです。

<sup>20</sup> カントは、認識の形式が内面に備わっていて、内容は外界から取り入れると考えました。統一思想は、人間が身体性を持つことにより、内容と形式の両面で、世界との相似性をもっていると考えます。これは、神学的には、「神が人間をモデルにして世界を創造した」という点に依拠しています。

れ、いわば傍観者として問うという意味です。それぞれの方向をとる典型的な学は、宗教と物理科学です。

このように真理を探求する方法は、創造と復帰、内的と外的という二つの軸の中で、それぞれの学の研究対象によって、特異化されます。例えば物理学における探求は、自然的で外に向かうのに対し、精神病理学では、内外、創造と復帰が交錯する領域で、探求が営まれます。

真理を方法との関連で考察するという課題は、さらに考察すべき問題を提示します。まず、真理と解釈のかかわりを解明する必要があります。あらゆる学、人間の理解の営みが解釈を伴っているならば、さらに啓示もそれを解明するための解釈が不可欠ならば、解釈は何を基準にその解釈の正しさを立証できるのか、解釈はどのように行われるのか、さらに解釈とはそもそも何なのかという一連の問いがあります。たとえば、あることがら啓示であるとし、啓示の意味は読み解かれ、解釈されます。しかし、その解釈の正当性は何によって正当化されるのでしょうか。解釈の基準になる真理がまた問われます。このように真理の循環性の問題は、解釈における真理の循環性の問題となります。解釈をめぐる問いは、言語、歴史と真理のかかわりをも含む根本的かつ包括的な問いにつながってゆきます。